

高校生の障害観に及ぼす要因の検討（1）

—各属性、接触頻度及び交流経験による差異に焦点を当てて—

○佐藤 賢也¹ 大桑 初音¹ 五島 脩¹ 高野 陽介² 泉 真由子³

(¹ 横浜国立大学大学院教育学研究科) (² 東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科) (³ 横浜国立大学教育学部)

KEY WORDS: 障害観 高校 質問紙調査

【目的】

これまでの障害に対する意識、障害観に関する研究では、対象を成人以上としたものが多く、高校生や大学生の障害観を明らかにした研究はあまりみられない。

そこで本研究では、障害当事者による講演の前後に質問紙調査を実施し、高校生の、①日常生活場面での障害者への差別、偏見、かかわり方についての意識、②学校生活でのかかわり場面についての意識を明らかにし、性別、教育年数、小・中学校での交流経験、障害のある人との接触頻度による差異がみられるかを検討することを目的とする。本報告では、1次集計結果の一部を報告する。

【方法】

対象者：研究協力校の高等学校1校に在籍している高校1年生から高校3年生の全生徒を対象とした。

調査方法：調査は匿名で実施し、担任教諭により調査票の配布・回収を行って頂いた。

調査内容・分析方法：山梨県(2016)、静岡県(2007-2008)の調査を参考にし、複数人での検討、高校生への予備調査を実施し、質問紙を作成した。調査内容は、①基礎属性(性別、学年)、②身近に障害のある人がいるか(いたか)、③小・中学校での障害のある児童生徒との交流経験について、④障害のある人と接する頻度について、⑤日常生活場面での障害者への差別、偏見、かかわり方についての意識について(6項目)、⑥学校生活でのかかわり場面についての意識について(9項目)である。④については接する機会の頻度を4件法により、⑤および⑥については、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の5件法にて回答を求めた。講演前は①、⑤、⑥、公演後は①～⑥を尋ねた。

【結果】

研究協力校である高等学校にご協力頂き、全校生徒に回答を求めた。回収率は講演前97%、講演後91%であった。講演前後共に完全回答であった863名(有効回答率は83%)を分析の対象とした。

(1) 基礎属性、身近な障害者、交流経験、接する頻度

性別は、男性470名(54.5%)、女性393名(45.5%)であった。学年は、1年生296名(34.3%)、2年生325名(37.7%)、3年生242名(28.0%)であった。身近に障害のある人がいるか(いたか)について複数回答を求めたところ、自分自身に障害がある7名、家族等身近な親族100名、隣近所80名、小学校446名、中学校348名、高校38名、その他35名、身近にいたことはない226名であった。小・中学校のとき、特別支援学級の児童生徒と一緒に学習する機会があったかについては、小学校であった242名(28.0%)、中学校であった109名(12.6%)、小・中学校共にあった120名(13.9%)、どちらもなかった392名(45.4%)であった。障害のある人と接する機会については、Table 1に示した。

Table 1 障害のある人と接する機会

	全くない		何回もあった		月に1回程度ある		週に1回以上ある	
	回答数	%	回答数	%	回答数	%	回答数	%
1 障害のある人を見かける機会がある。	78	9.0%	433	50.2%	217	25.1%	135	15.6%
2 障害のある人と話す機会がある。	521	60.4%	279	32.3%	24	2.8%	39	4.5%
3 障害のある人と一緒に活動する機会がある。	573	66.4%	248	28.7%	12	1.4%	30	3.5%

(2) 日常生活場面について

「友達になるのに障害の有無は関係ない」に対しては、

約80%の生徒が「とてもそう思う」もしくは「まあまあそう思う」という肯定的な回答をした。また、「電車やバスの中で障害のある人と隣の席になっても気にしない」、「障害のある人が困っている様子を見かけたら声をかける」に対しても、半数以上の生徒が肯定的な回答をした。

「結婚相手に障害の有無は関係ない」と「障害がある人とかかわることのできるボランティア活動に参加したい」については、「あまり思わない」、「全くそう思わない」と回答した生徒が20%以上おり、他の項目に比べ、否定的な回答が多い傾向がみられた。

(3) 学校生活場面について

9つの項目を肯定的な設問4項目と否定的な設問5項目に分けて集計を行った。

まず、肯定的な設問については、「障害のある生徒が同じクラスにいても気にしない」、「障害のある生徒と学ぶことで自分たちにも良い影響がある」、「障害のある生徒の障害や症状について先生から説明してほしい」、「高校でも障害について学ぶ機会があった方がいい」の全ての項目において、半数以上の生徒が肯定的な回答をした。特に、「障害のある生徒が同じクラスにいても気にしない」に対しては、75%以上の生徒が「とてもそう思う」もしくは「まあまあそう思う」と回答した。

次に、否定的な設問については、「自分が障害のある生徒とかかわることを、親はよく思わないと思う」については、「全くそう思わない」と回答している生徒が45%以上おり、「あまり思わない」と回答した生徒も含めると、約68%の生徒が肯定的な回答を示した。「障害のある生徒と接することに戸惑いや不安がある」については、約40%の生徒が「とてもそう思う」もしくは「まあまあそう思う」と回答しており、他の項目と比べ回答数が多い傾向がみられた。

【考察】

生活場面において、公共の場でのかかわりについて肯定的な回答が多かったのに比べ、交流や結婚、ボランティア活動など実際に障害のある人とより深くかかわる項目に関しては、「どちらでもない」に回答が集中する傾向があったことから、障害のある人とのかかわりの具体的なイメージが湧きにくく、肯定的な回答をしづらかったのではないかと考えられる。

学校生活場面の肯定的な設問については、全項目で高い得点が見られたように、障害のある同級生に対して積極的にかかわっていかうとする意識があると考えられる。

否定的な設問については、特に高い得点を示す項目はなかったが、障害のある生徒に対して戸惑いや不安がある傾向がみられた。肯定的な質問の、「先生からの説明」や「障害について学ぶ機会」に対して肯定的な回答が多かったことから、障害のある生徒と積極的に関わろうとする気持ちはあるものの、障害の症状や知識がなくどのようにかかわったら良いかわからず、戸惑いや不安が高くなるのではないかと考えられる。今後、詳細に分析し、各属性、接触頻度、交流経験による差異について明らかにしていく。

(SATO Kenya, OKUWA Hatsune, GOSHIMA Osamu, TAKANO Yosuke, IZUMI Mayuko)